

コウノトリ学習における副読本の利用状況について — 兵庫県豊岡市「ふるさと教育」を事例に

* 本田裕子¹

A research about utilization status of a supplementary educational material in Oriental White Stork learning — a case of local education at Toyooka, Hyogo, Japan —

* Yuko Honda¹

¹ Department of Human Life and Environment Studies, Faculty of Human Studies, Taisho University, 3-20-1 Nishi-sugamo, Toshima-ku, Tokyo 170-8470, Japan

* E-mail: yukohonda2013@gmail.com

Abstract In this research, utilization status of a supplementary educational material in Oriental White Stork learning was analyzed through the questionnaire surveys, and visitation of some classes. As a result, it was evaluated that the supplementary educational material was easy for children to understand the contents, and was easy for teachers to use it in their classes. It was also found that there were many teachers who did not have experiences in teaching about Oriental White Storks. Therefore, the material could play an important role in obtaining accurate information. Material itself was also adopted as rental item, children cannot write or draw in it, and cannot bring it to home. It is necessary to improve current rental item operation for the better learning in future.

Key words Local education, Oriental White Storks, Supplementary educational material, Toyooka-city

背景・目的

本研究では、2017年4月から豊岡市内の小学校・中学校で実施されている「ふるさと教育」でのコウノトリ学習における副読本の役割に着目する。「ふるさと教育」は、目指すこども像を「豊岡の『ひと・もの・こと』の

つながりと未来を世界標準で考え、ふるさと豊岡を自分の言葉で語り誇れる子」とし、小学校3年生から中学校3年生までに、「コウノトリ」、「産業・文化」、「ジオパーク」について学習する。「コウノトリ」については小学校3年生と小学校5年生が学び、中学校3年生では他の学年で学習した「産業・文化」と「ジオパーク」を併せて、3つのテーマ全体の学習のまとめを行う。小学校3年生では「コウノトリを知る」をテーマに15校時学習する。小学校5年生では「コウノトリと共に生きる」をテーマに15校時学習する。

「ふるさと教育」のテーマの1つにコウノトリが選ばれたことは、長年の保護活動および野生復帰の取り組みにより、コウノトリが豊岡市のシンボルとして認識されていることによる。そして、コウノトリの野生復帰の取り組みが注目されたことにより、観光客の増加や農作物の付加価値につながり、コウノトリが地域資源としての価値を高めていることも関係しているだろう。2018年12月16日時点でコウノトリは国内でおよそ144羽が野外に生息しているが、野生復帰事業が今後も長期的に展開されることから、地域住民の意識啓発として、また次世代の担い手育成という意味でもコウノトリが教育資源として認識されていることといえる。

「ふるさと教育」は、市内の全ての小中学校を対象としていることから標準カリキュラムが設定されているが、どの学校でも、教員の関心や知識に関係なく、教えられる教材として、副読本の利活用の必要性が認識されていた。豊岡市は、「ふるさと教育」の副読本として2017年3月に『豊岡ふるさと学習ガイドブック』を作成・発行した(図1左)。この副読本を活用することで、「コウノトリ」、「産業・文化」、「ジオパーク」に関するさまざまな知識をこどもたちに教えることができる。A4判本文144ページで、資料集としての位置づけであり、こどもに配布するのではなく、学校に置き、必要な時に1人ずつに貸与する形式で利用される。副読本では、コウノトリについて66ページの紙幅があり、「コウノトリを知る」「世界基準で進むコウノトリ野生復帰」「共感の広がり」「全国へ、そして世界へ」「未来へ・・・」の5章構成となり、付録資料として野外にい

¹ 大正大学人間学部人間環境学科
170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1
* E-mail: yukohonda2013@gmail.com



図1. 副読本「豊岡ふるさと学習ガイドブック」(左) およびその中のコウノトリ部分の一例 (右) (2017年6月3日筆者撮影).

るコウノトリの足環の一覧表や、江戸時代から現在までのコウノトリをめぐる歴史をまとめた年表もついている (図1右).

そもそも副読本は、補助教材の一つとされ、社会科の地域学習をはじめとして、主に教科用図書が編纂されていない「総合的な学習の時間」や特別活動等のために作成される。必要があれば地域の教育委員会に届け出た上で、学校ごとで使うことができる。各学校の教育実態に応じた柔軟な活用ができ、継続して作成できれば最新情報を盛り込むことができる。

副読本に関する先行研究で注目されるのは、副読本の開発を含めた作成過程やその実践に着目した研究である。近年では例えば、社会科の地域学習に関する副読本の開発 (原ほか 2018) がある。また環境教育分野では服部ほか (2018) が森林環境教育をテーマに副読本を作成し、実際に小学校での実践報告をしている。副読本の利用状況については、古くは松井 (1983) が愛知県西三河地方、近年では伊藤 (2017) が愛知県三河地方での社会科の地域学習に関する副読本の利用状況を自治体横断的に報告している。これらの先行研究をふまえると、ある特定の副読本については、その開発・作成過程や実践についての報告はあるが、その利用状況については十分に取り上げられていないように思われる。また伊藤 (2017) は、副読本を用いた地域学習実践の分析や副読本の作成・利用における地域差への視角の重要性を指摘

している。前述した豊岡市の副読本『豊岡ふるさと学習ガイドブック』は社会科の地域学習ではなく、「総合的な学習の時間」での「ふるさと教育」の副読本であるが、身近な地域を学習する、という共通点がある。『豊岡ふるさと学習ガイドブック』の作成については本田 (2017) が整理しているが、「ふるさと教育」の指導内容の組み立ては基本的には担当教員の裁量にゆだねられており、副読本の利用も同様に教員にゆだねている状況である。豊岡市で「ふるさと教育」におけるコウノトリ学習を推進していく上で、実際に豊岡市内での副読本の利用状況を把握することは重要な作業といえ、地域学習の副読本の利用状況を考えるの一助にもなると考えられる。

そこで本研究では、副読本である『豊岡ふるさと学習ガイドブック』がどのような役割を果たしているのか、その利用状況を把握することを通じて、副読本の利用状況と課題を整理し、今後の活用の展望を考察することを目的とする。

方法

本研究では、豊岡市コウノトリ共生課および子ども教育課の協力の下、市内の29ある全ての小学校の5年生とその担当教員を対象に、コウノトリ学習の終了段階でアンケート調査を実施した結果を用いる。アンケート調査

表1. アンケート調査についての概要.

区分	実施期間	対象者数 (校)	回答者数 (校)
小学校5年生 担当教員	2017年12月から2018年3月 同上	734人 (29校) 36人 (29校)	687人 (25校) 28人 (21校)

表2. 見学およびインタビューを実施した4つの小学校について。

小学校名	見学日時	インタビュー実施日時	5年生児童数(2017年4月時点)と学級数	実施したコウノトリ学習の概要	発表方法	見学時の状況
A小学校	2017年10月11日 3・4時間目	2018年3月13日 昼休み	23人、1クラス	ゲスト授業(コウノトリの郷公園・市共生課)、副読本やインターネットを使って調べ学習	保護者や地域の方々向けの発表会(パワーポイント)	調べ学習(各自が調べたいことを挙げて、副読本やタブレットを使って調べる)
B小学校	2017年10月30日 3・4時間目	2017年12月15日 昼休み	49人、2クラス	ゲスト授業(コウノトリの郷公園、市共生課、農業改良普及センター)、副読本やインターネットを使って調べ学習	保護者や地域の方々向けの発表会(模造紙)	話し合い学習(各自で調べたことをふまえて)
C小学校	2017年11月28日 5・6時間目	2017年12月21日 放課後	81人、3クラス	ゲスト授業(市共生課)・副読本やインターネットを使って調べ学習	コウノトリに関するカルタ作成	カルタ作成作業(彫る、刷る)
D小学校	2018年2月10日 12時30分～13時30分	2018年2月21日 放課後	69人、2クラス	見学(コウノトリの郷公園)・ゲスト授業(市共生課)・副読本やインターネットを使って調べ学習	保護者や地域の方々向けの発表会(劇・紙芝居・クイズ形式)	発表会

表3. 副読本はわかりやすかったか(小学校5年生)。

	人数	割合(%)
とてもわかりやすかった	376	54.7
少しわかりやすかった	267	38.9
あまりわかりやすくなかった	35	5.1
まったくわかりやすくなかった	9	1.3
回答者数	687	100.0

表4. 副読本で一番よく使ったところ(小学校5年生)。

	人数	割合(%)
1章コウノトリを知る	207	30.1
2章世界基準で進むコウノトリ野生復帰	203	29.5
3章共感の広がり	57	8.3
4章全国へ、そして世界へ	129	18.8
5章未来へ	51	7.4
資料	40	5.8
回答者数	687	100.0

表5. 副読本の使用頻度(教員)。

	人数	割合(%)
毎回使用した	9	32.1
半分ぐらいは使用した	14	50.0
時々使用した(半分より少ない)	5	17.9
全く使わなかった	0	0.0
合計	28	100.0

表6. 副読本は使いやすかったか(教員)。

	人数	割合(%)
とても使いやすかった	18	64.3
やや使いやすかった	10	35.7
あまり使いやすくなかった	0	0.0
全く使いやすくなかった	0	0.0
合計	28	100.0

表7. 副読本に関して気づいた点 (教員).

項目	内 容
良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・カラーで写真が多く良かった ・歴史、野生復帰について、保護、湿地等との関わりが読みやすく書かれていてよかったです。 ・写真や文はもとより、表やグラフがありそのデータが根拠となった。 ・写真、グラフ、地図などが多く取り入れられていて、児童に分かりやすい構成になってよかった。 ・分かりやすくまとめられていた。 ・各章、各項でコウノトリに関する情報が整理されていたので、教科書としても活用できるし、児童の調べ学習にも活用できる。 ・非常に分かりやすくまとめられていて、調べやすかった。たくさんの情報がつまっている。まずは、このガイドブックを子どもたちにしっかり読んで考えてほしいと思った。 ・豊富な資料が調べ学習に役立った。 ・非常にくわしく、分かりやすくまとめてあり、参考になりました。
内容への要望	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと納税のことも入れてもらえると、市の取組も少しわかりやすくなり、発表につなげられると思う。ラムサール条約は小5にすると、難しいような気がする。 ・漢字の読み仮名をつけていただけると、もっと使いやすくなると感じました。 ・写真が沢山ありとても見やすかったですが、簡単なグラフ数値をもう少し追加していただきたいです。 ・コウノトリに関する多様な情報がまとめられていて、子どもたちは、分からないことがあるとすぐに手にとろうとしており、使いやすかった。コウノトリ育む農法のページについては、もう少し言葉が易しく、ふりがながついていると、さらに使いやすいと思う。
ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートがあると大変ありがたいです
貸与方式に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・配布できるとよいと思います ・詳しい情報が載っており、助かりました。インターネットで「どれが正しいか分からない」と思う情報が多い中、「ガイドブックは確実な情報」として安心して活用することができました。やわらかい素材で、貸与方式であることから持ち帰っての学習がしづらいと感じました。 ・ガイドブックが1人1冊個人持ちになると書き込めたり継続的に使ったりしやすい。しかし、今、1人1冊授業で使用できていることは大変ありがたいです。 ・コウノトリの取り組みに関して、横断的に書かれており、とても良い資料だった。資料の中に難しい言葉や表現があり、理解に時間がかかる児童がいた。持ち帰って読みこませたかったが、貸与方式であったので、ためらわれた。 ・一人に一冊配布してもらえると、ありがたい (個人持ちにしてほしい)。 ・一人一冊持てると、書き込めるので、指導、活用しやすい。又、改めて読み返すこともできる。 ・書き込んだり、印をつけたりできるように、個人持ちだとうれしいです。

については、ふるさと教育の学習効果を測定するために、さまざまな質問をしたが、本研究では、副読本に関する質問結果のみを検討する (注1)。アンケート調査の実施概要については表1に整理した。

また、アンケート調査の実施と並行して、豊岡市こども教育課・コウノトリ共生課の協力を得て、授業見学が可能な4校について、2017年10月から2018年3月にかけてコウノトリ学習の授業見学および担当教員へのインタビュー (注2)を実施し、コウノトリの学習状況および副読本の利用状況についても把握した。授業見学およびインタビューの実施概要については表2に整理した。表2では、各校が実施したコウノトリ学習の概要も併せて記載する。

結 果

1. アンケート調査結果

1-1) 小学校5年生へのアンケート調査結果

副読本がわかりやすかったかという質問に対しては、「とてもわかりやすかった」が54.7%だった (表3)。「少しわかりやすかった」と合計すると9割になり、副読本が「わかりやすい」と認識されている。副読本 (コウノトリの部分) で一番よく使ったところについては、「1章コウノトリを知る」(30.1%)、「2章世界基準で進むコウノトリ野生復帰」(29.5%) がほぼ同程度に多く選ばれていた (表4)。学校により使った部分に違いは見られたが、コウノトリや野生復帰の取組についての基本的な理解を学習したことが伺える (注3)。

1-2) 教員へのアンケート調査結果

副読本の使用頻度については、「全く使わなかった」がゼロ回答であり、「半分ぐらひは使用した」(50.0%)、

「毎回使用した」(32.1%)が続く(表5)。副読本が使いやすかったかについては、「あまり使いやすくなかった」と「全く使いやすくなかった」がゼロ回答であり、「とても使いやすかった」(64.3%)、「やや使いやすかった」(35.7%)となった(表6)。

「豊岡市が作成した副読本『豊岡市ふるさと学習ガイドブック』について、何かお気づきの点などがありましたら、ご自由にお書きください。」という質問には、自由記述で21校全ての記述が得られた。その内容については表7に整理した。

カラーであり、写真や地図などが多用され、わかりやすくまとめられていると評価する記述もあったが、中学校3年生まで使うため、小学校5年生には難しい内容が含まれていること、ふりがなの要望や、貸与方式に関する意見も寄せられた。副読本は貸与方式であって持ち帰りづらく、配布方式を望む意見があった。

なお、アンケート票の最後に設けた自由回答欄では副読本についての記述が1校あり、「ふるさと学習ガイドブックがとても良いです。見やすく、説明も丁寧で分かりやすいので、子ども達はたくさん活用していました。」と書かれていた。

2. 授業見学および担当教員へのインタビューの結果

2-1) A小学校

見学当日の授業の流れを(1)～(7)に整理した。3時間目と4時間目の連続授業であり、(1)～(5)までは3時間目で、(6)・(7)が4時間目となっている。

(1)：担当教員が副読本を配り、前回授業のメモ(前回授業は、豊岡市コウノトリ共生課伊崎実那氏によるゲスト授業で、子どもたちがメモしたもの)を子どもたちに返す。

(2)：担当教員が黒板に「コウノトリについて、疑問や調べたいことを整理しよう」と書かれた紙を貼る。

(3)：紙を配り、名前を書かせ、(2)のことを2つ書かせていた。

(4)：(3)について子どもたちが発表。子どもたちが順番に話していく形。

(5)：(4)について予想を子どもたちに考えさせ、子どもたちが発表していく。

(6)：調べたことを書くプリントを配布。子どもたちが副読本や教員が図書室で借りてきたコウノトリ関連の書籍、タブレットを用いて、それぞれ調べ学習を行った。

(7)：次回のアナウンス。「調べたことをどう伝えるのか?誰に伝えるのか?」を子どもたちに伝えていた。

上述のように、A小学校では、コウノトリについて各自が調べ学習をして、その内容を全員で共有していく形で授業を展開していた。子どもたちの調べたいこと(上述の(2)や(3))については、筆者のメモをもとに以下に整理した。

○コウノトリの生態・体の特徴について

- ・コウノトリのヒナは親を失ったらどう育つのか?
- ・ヒナが卵から何日ぐらいでかえるのか?
- ・生まれてからいつになったら飛べるのか?
- ・コウノトリは何年生きるのか?
- ・速さはどれぐらい?(飛ぶスピード)
- ・コウノトリはいろいろなところに飛んでいるけど、どれぐらいのスピードで飛んでいるのか?
- ・どこまで飛んでいくのか?
- ・なぜコウノトリは海に行かないのか?
- ・どれぐらい体力があるのか?
- ・1日どれぐらいの量を食べるのか?
- ・どうして植物は食べないのか?
- ・なぜ広げると2メートルぐらいになるのか?
- ・クラッタリングの意味、口ばしをあげる意味
- ・コウノトリの首の動き
- ・どんな天敵がいるのか?

○コウノトリの暮らす環境

- ・豊かな環境をどう作るのか?

○コウノトリの保護活動

- ・コウノトリの保護について他県ではどんなことをしているのか?
- ・豊岡では農薬を使わない取り組みをしているが、福井県や他ではどんな取り組みをしているのか?

○その他

- ・誰がどんな理由で「コウノトリ」とつけたのか?名前の由来

単に、調べたいことをただ調べるだけではなく、事前に子どもたちに予想させていたことは、子どもたちに考える力をつけるよい機会といえる。しかし、子どもたちの調べたいことの多くがコウノトリの生態や特徴に関することであり、3年生のテーマ(「コウノトリを知る」)に近い内容といえ、5年生のテーマ(「コウノトリと共に生きる」)に関連する保護活動や歴史や生息環境づくりに関する内容が少数であった。A小学校がこれまでコウノトリ学習を実施していなかったために、現時点では子どもたちの興味関心がコウノトリそのものに向



図2. A小学校で教室内に置かれている副読本 (2017年10月11日筆者撮影).



図3. B小学校での学習成果ポスター (左右共) (2017年12月15日筆者撮影).

けられているといえる。

副読本は、教室内にまとめて置かれており (図2)、授業の際に配布されていた。授業見学では、子どもたちが調べ学習をする際に副読本を参考にしていることがわかった。教員も子どもたちに、副読本について「よくできている」と紹介しており、タブレットを使っている子どもたちもいたが副読本を使っている子どもも多く、子どもたちには副読本が重要な情報源になっていることが伺えた。

なお、後日コウノトリ学習後に担当教員にインタビューをしたところ、A小学校では、副読本やインターネットなどを使ってコウノトリについて調べ、一人一人が新聞を作成し、2018年2月に家族や地域の方に向けて発表をしたとのことである。副読本については、情報がたくさん掲載されており役立ったとのことだった。さらに、子ども用のワークシートや教員用のポイント集があると便利であることも伺えた。

2-2) B小学校

通常は2クラスではあるが、見学日は合同授業で実施されていた。コウノトリ学習のテーマ別にグループに分かれ (4~5人程度)、各自が調べてきた内容の報告をすることで、グループ毎に課題整理が行われた。担当教員の話では、前回の授業 (豊岡市コウノトリ共生課の伊崎実那氏によるゲスト授業) をうけて、子どもたちはコウノトリのことよく知らないと感じ、改めて「コウノトリのことを調べてみよう」という流れでのグループ学習となったとのことである。テーマは、筆者がメモした以下であり、コウノトリの生態や保護活動に関するものから、「コウノトリ育む農法」やコウノトリを活かしたビジネスといった社会的な取り組みに関するものまで幅広く分かれていた。なお、テーマは教員が決めて、それぞれに希望した子どもたちがグループを構成した。

- コウノトリの特ちょう
- 人工飼育の歴史

○他のまちでの取り組み

- コウノトリを増やすための取り組み
- コウノトリ育む農法
- コウノトリビジネス
- コウノトリが増えたら・・・
- コウノトリの知名度
- コウノトリがどこで食べるか

見学日は3時間目と4時間目であり、3時間目では、「わかったこと・思ったこと・質問を話し合ってみよう」という位置づけで、各自で調べたことをグループ内で交流していた。4時間目は、グループ内でそれぞれの発表のテーマとなる言葉・キーワードになる言葉をみんなで考えていた。3時間目・4時間目ともにグループ内での話し合いであり、教員がグループの様子を見て回っていた。

話し合いは積極的に行われていた。子どもたちの特徴的な発言を挙げると、まず、コウノトリが増えたら他の生物が減らないかを心配している子どもがいた。他にも、季節によってコウノトリの食べるえさ生物の違いに気づいた子どもが、田んぼだけではなく他の場所も守る必要を感じていた。また、コウノトリについて、お金以外の「いいこと」を考えているグループもいた。また、話し合いは基本的には教員が作成したワークシートに基づいて進められ、教員の工夫が重要であることが伺えた。

なお、後日コウノトリ学習後に担当教員にインタビューをしたところ、調べ学習の成果として、グループ毎に模造紙を使い、ポスター発表を行ったそうである。ポスターの一部は図3となる。副読本を含め複数のツールを使ってコウノトリ学習を展開し、インターネットの情報が正しいかどうかは、副読本と照らし合わせる形で確認していたとのことであった。

また、B小学校には、コウノトリの剥製があり、1971年の野生下絶滅以前のコウノトリと思われるが、来歴不



図4. C小学校での完成したカルター例（左）、完成したカルタの掲示（中央）、および廊下に置かれている副読本（右）（2017年11月28日筆者撮影）。

明とのことであった。あまり目立たない場所に置かれているため、その存在にこれまで気づかなかったと話す子どももいた。かつてコウノトリは、B小学校のある出石エリアを中心に生息していたことから、「出石とコウノトリ」をテーマにすることも今後の学習の工夫として面白いと感じられた。

2-3) C小学校

C小学校では、コウノトリに関するカルタ作成を行っており、見学日は5時間目と6時間目で、教室内で彫刻刀を使い「彫る」作業を各自で行い、終わった子どもは図工室で「刷る」作業に入っていた。

C小学校は3クラスあり、授業の最初に全員が廊下に集まり、図工の教員から「彫る」「刷る」作業についての注意点があった後、各自の教室で担任教員の監督の下で作業が行われていた。担任教員は、現在はコウノトリ学習の11、12時間目に相当し、今回で彫る作業を終えたいと話していた。これまでの経緯では、最初の4時間でコウノトリに関して、ガイドブックやインターネットを使って調べ学習をした上でコウノトリに関するカルタ作りの文字と文章を考える時間があったとのことであった。文字は自由で、基本ひらがなだが、漢字（例：大）やカタカナ（例：ハ）もある。各クラス、28、29人程度なので、それぞれ28、29字のカルタができる。クラス内で文字が同じになった場合は調整したとのことである。3つぐらい候補を書いている子どももいた。少し見せてもらったところ、例えば、「『い』ランのラムサークル」というメモ書きのある子どももいた。文字が決まったら、その内容に合わせて絵を描く。それをボールペンでゴム版画に下書きをして、彫刻刀で彫り、刷る作業となっていく。

文字の調整はあったが、具体的な内容はクラス内で共有はせずに、できてからのお楽しみという形をとっているクラスもあった。今後は完成したカルタを使い、クラス内でカルタをして、その後低学年の子どもたちとカル

タをする、という予定であった。

見学では、彫刻刀の扱いが上手な子どももいれば、かなりゆっくり作業をしている子どももいた。なお、子どもたちは彫刻刀の扱いは初めてではないとのことであったが、担任教員は怪我をしないように気を付けていた。また、ほとんどのカルタでコウノトリの絵が描かれており、上手に描けていた。完成したカルタの一例は（図4左）となり、後日教室の外に全員分が掲示されていた（図4中央）。見学日は作業であったので、副読本は使われていなかったが、廊下にまとめて置かれているのを確認できた（図4右）。

後日コウノトリ学習後に担任教員にインタビューをしたところ、そもそもカルタ作成をコウノトリ学習に選んだのには「発信」という目標があった。C小学校では、「ふるさと教育」開始以前から、小学校3年生で生きもの調査を実施するなど、コウノトリ学習を実施しており、これまでの学習と同じにならないように検討した中で「発信」という目標を考えたそうである。背景には2017年5月に鳥根県雲南市で発生したコウノトリ誤射事件があり、多くの人にコウノトリのことを知ってもらう必要があるのではないか、と考えたそうである。そして、カルタを作成し、それを例えば下級生の子どもたちに遊んでもらうことで下級生はコウノトリについて知る・学ぶ機会になり、5年生の子どもたちがコウノトリのことを伝える機会になるとのことであった。

子どもたちがどのような内容のカルタを作成するのかについて考える上で、副読本は役立つそうである。調べ学習の際にインターネットも使用可能であったが、子どもたちはインターネットでのコウノトリに関する情報が正しいかわからず、「結局ガイドブックに戻ってくる」とのことであった。また、学校での置き本という形の貸与方式ではなく、子どもたちに1人1冊配布できれば、副読本が自分たちのものとなり、さらに副読本を持っていることが「豊岡の子ども」の象徴になるのでは

ないか、という話も伺えた。

これまで見学した他の小学校の調べ学習とは異なり、カルタ作成は新鮮であった。図工の教員とも連携していて興味深かった。こどもたちは彫る作業が「大変だ」と話しながらも、それぞれ楽しく作業をしている印象であった。カルタは「発信」のツールであるので、カルタ作成を入りに、他のこどもが作成したカルタと自分のカルタをつなげたり、低学年のこどもたちへのカルタ遊びをしたりすることを通じて、さらなる気づきが生まれる可能性を感じた。

2-4) D小学校

D小学校では、JICA研修生が授業見学に訪れることから2月2日に研修生への発表会と、2月10日に保護者向けの発表会を実施することをゴールに、グループに分かれて調べ学習を行った。発表会では、グループによってクイズや寸劇を使って、わかりやすく時には面白く自分たちが調べたことを発表していた。JICA研修生に合わせて、「歴史」や「えさ場」などを英単語に置き換えていた。

以下、発表のあったグループを挙げる。最初は歴史から始まり、内容はコウノトリに関するものが多かったが、遺伝的多様性や生物多様性条約や国家戦略といった小学校5年生には少し難しいと思われる内容も一部含まれていた。途中や最後に保護者や同級生に感想を求めるインタビューコーナー (Interview) もあった。発表会の最後には、嵐の「ふるさと」をこどもたち全員で合唱していた。

- コウノトリの歴史 (History)
- コウノトリが増えていること (Numbers)
- コウノトリや生物を守るしくみ (How to protect)
- コウノトリのえさ場 (Diet)
- 豊岡以外でコウノトリのすむ町 (Where they live)

発表では、ただ調べたことを発表して終わりではなく、自分たちの感想も述べられていた。例えば、韓国のコウノトリを調べたことについては、「いろいろな人に大切にされていることを知った」という感想や、長距離を移動するコウノトリを調べて「コウノトリが世界各地に広がっていけばいいと思った」という感想、そしてラムサール条約登録湿地が豊岡市内にあることを調べ「豊岡市にあることを知って守っていこうと思った」という感想があった。また、コウノトリの人工飼育を調べたグループでは「たくさんの人たちに支えられていることがわかった。みなさんもコウノトリを大切にしてください」という発言も見られた。

そして、感想の中には「勉強してからコウノトリにとって大切な場所にゴミや物を捨てないようにする。捨てている人には注意する」「ポイ捨て、環境によくないことをしないようにしようと思いました」という発言が複数あった。コウノトリとの共生のために「ポイ捨てをしない・ポイ捨てを注意する」という行動と結びつけていた。

後日コウノトリ学習後に担当教員にインタビューをしたところ、D小学校は校区内にコウノトリがほぼ飛来しないこともあり、当初こどもたちの中には「なんでコウノトリせんなんのかな」という雰囲気があったようである。そこで、小学校3年生の時に実施した生きもの調査の振り返りや、コウノトリの郷公園に見学を訪れ、3年生の見学時とは違う視点を学ぶことができ、こどもたちがコウノトリに興味関心を持つことができたようである。副読本については、索引やQ&Aのような工夫があるとこどもたちも調べやすいとのことであった。中学生にも対応しているためか、例えば資料編など、小学校5年生にとっては言葉遣いや内容が難しい部分があったこともわかった。また、副読本は学校の置き本という貸与方式であるため、こどもたちが直接書き込みできない、マーカーが引けないという不便さがあったようであり、付箋を使って対応したとのことであった。

2-5) まとめ

授業見学では、コウノトリについて自分の知りたい内容を副読本やタブレットを使って調べている様子、各自で調べた内容をグループ内で話し合っている様子、コウノトリに関するカルタを作成している様子、調べた内容を保護者に向けて発表している様子があった。共通点としては授業ではこどもたちがコウノトリについて調べ学習をしているということである。学校により多少の形式の違いが見られるが、コウノトリ学習が、コウノトリ郷公園といったコウノトリ関連施設の見学、コウノトリの野生復帰の取り組みに関して詳しい人を招いたゲスト授業、そしてこどもたちがテーマに分かれてコウノトリについて調べ学習をする、調べ学習の成果を発表する、という内容で構成されていたことが明らかになった。一方的に教員がコウノトリについて授業を展開するのではなく、調べ学習を通じて主体的に学ぶというのは、「総合的な学習の時間」の特性ともいえるが、コウノトリ学習も同様に進められていることがわかった。調べ学習の際に、副読本以外にもタブレット等のインターネットを活用している学校もあったが、インターネットでのコウノトリに関する情報が正しいかわからない場合は、副読

本で確かめることができるという利点があった。副読本は学校での置き本であるため、教室もしくは廊下にまとめて置かれていたことも確認できた。

C小学校はカルタ作成という特徴的な学習展開を行ったが、基本的にはどの小学校でも調べ学習を中心に、コウノトリ学習を組み立てており、コウノトリの郷公園を訪問していたのは4校中D小学校のみであった。C小学校のようなカルタ作成の取り組みは、「発信」を形にしており、コウノトリ学習の実施例として大変興味深いものといえる。

副読本は、クラス全員で共通して読むというよりはそれぞれの調べたいテーマに応じて資料集として利用されていた。また、副読本は子どもたちから「わかりやすかった」と認識されていたが、利用対象が中学校3年生までであるため、小学校5年生にとっては難しい言葉遣いや内容もあるということもわかった。小学校5年生で難しいと思われるのだから、小学校3年生の子どもたちにはもっと難しいであろう。

副読本は学校の置き本という貸与方式であるため、子どもたちは副読本に何か書き込んだり、マーカーをつけたりすることができない。また、コウノトリの部分だけではなく、産業・文化やジオパークといった他のテーマも一緒に含まれているため重く、家に持ち帰って読むことがしづらい。そもそも、貸与方式にしたのは小学校3年生から中学校3年生までの7年間使用するので、紛失や破損を考えてのことであったが、配布方式を望む意見が教員から挙げられていた。1人1冊の配布方式にすると、中学校3年生までに紛失してしまうかもしれないというデメリットも存在するが、テーマ毎の分冊化やもしくは小学生用と中学生用と分けるといった議論も今後副読本の改訂を検討する際に必要となってくるだろう。

考 察

以上から、コウノトリ学習の調べ学習において、副読本は資料集として重要な役割を果たしていることがわかった。小学校5年生の子どもたちからも「わかりやすかった」と評価され、担当教員からも高い評価を得ていた。2017年4月から実施されている「ふるさと教育」での学習プランは、豊岡市教育委員会から標準カリキュラムが示されているが、実際にどのような学習プログラムを組み立てるのは担当教員の裁量となる。授業見学から、コウノトリ学習は調べ学習が中心であることがわ

かり、その際には、コウノトリや野生復帰に関する正確な情報が必要といえる。教員はコウノトリ学習を指導する際に、情報の真偽がわかりにくいインターネットよりも、副読本を参考にした方が正確かつ効率的であるため、副読本を「役立つ」と認識していると考えられる。

「ふるさと教育」は市内の小中学校で一定時間の学習が定められており、そのため、該当学年を担当となった教員は、教員自身の持つコウノトリに関する知識や関心の程度に関係なく、コウノトリ学習を展開し、指導していかなければならない。その際に副読本が重要な役割を果たしていることは、豊岡市のコウノトリ学習に限らず、現在、地方創生に関連して各地で実施されている「ふるさと教育」においても重要な示唆を与えるものといえる。「ふるさと教育」には、さまざまな専門家のネットワークを構築すること、地域の評価をプラスに転換すること、学習成果を地域に還元することが不可欠とされる(玉井 2018)。他にも、教科横断的なカリキュラムづくり、教員自身のフィールドワークや地域内の人材マップ作成を含めた学校と地域の連携が指摘されている(柏木 2018)。このような指摘は「ふるさと教育」を展開していく上で重要といえるが、実際に学校現場で担当教員が取り組むとなると、特に昨今の教員の多忙さを考えると、どの学校でも同一のレベルで実現することは決して容易ではないだろう。副読本がこれらの指摘をふまえるような内容を盛り込んで作成されれば、教員の負担も軽減され、「ふるさと教育」が展開できるといえる。社会科における地域学習の副読本でも、教師用指導書や学習カリキュラムや単元構想等の例示、地域教材の研究手引きや情報の提供を、担当教員が求めていることを伊藤(2017)が明らかにしている。一方で松井(1978)は、地域観察・見学学習と結びつけて副読本を使用することの大切さや、さらに副読本に掲載されている情報や資料が多ければ、「児童の地域学習の活動を妨害する役割」を果たしかねないことを指摘し、「児童が地域を観察し、歩いて資料を集めながら学習することが原則である」「副読本に関連した学区の見学場所とその視点が、一覧表に作成され、地図にドットされるとよい」等の配慮の必要性を提起している。

このような「副読本の編集・作成側の意図と利用側の実践にずれ」(伊藤 2017)を解消するためにも、伊藤(2017)は社会科の地域学習の副読本の編集・作成側による教員向けの地域学習の指導と研修の機会を設けることを提起している。これは松井(1983)の時点ですでに指摘されていたことであり、年度初めに3年生・4年生

担任教員全員に対する副読本の編集方針と使用上の力点の説明会を毎年催すことや、新任教員の市内施設の社会科巡検を副読本と連携させることが述べられている。これらの先行研究での指摘は、本研究で扱ったコウノトリ学習での副読本においても必要となる可能性があるといえる。松井 (1983) の時点で指摘されていることから古くからの課題といえるが、言い方を換えれば、実現 (解決) が難しい課題ともいえる。豊岡市のコウノトリ学習においては、メディアからも注目されている「コウノトリの野生復帰」を扱うということで、社会科の地域学習と異なり、ある程度テーマが絞られているが、今後もコウノトリの野生復帰の取組が継続して実施されていくことをふまえると、将来的にはコウノトリ学習がマンネリ化やルーティン化していくことも予想される。「副読本の編集・作成側の意図と利用側の実践にずれ」が生じないように、作成側はもちろん利用側も双方に意識していくことが求められるだろう。

本研究では、副読本の貸与方式に課題があることを把握することができた。そもそも先行研究でも取り上げてきた社会科の地域学習では副読本はおおむね配布されている。社会科や地域学習、体験的な学習に役立つ副読本の今後のあり方として、「書き込み、着色など作業ができる『書き込み作業』・体験的な学習型の副読本」や「子ども一人でも学習を進めることが可能な副読本」が提言されている (古岡 2003)。本研究では、教員へのアンケート調査やインタビューで得られたように、貸与方式による不便さが課題として析出された。すでに述べたように紛失や破損、そして自治体の財政状況の制約を考えて採用された貸与方式であるが、今後改訂を検討する際には内容のアップデートに加えて配布方式も議論に入れるべきであろう。例えば、一人一人への配布を可能とするために、コウノトリ、産業・文化、ジオパークに分け、分冊化することや書籍化して一般向けにも販売し、紛失や破損の場合は購入してもらうような形をとることも考えられる。また配布方式が難しい状況であれば、貸与方式と並行して、コウノトリに関する学習のポイントが記載されているようなワークブックを配布し、子どもたちが副読本で得られた理解や学んだことを書き込めるような、さらなる学習展開を企図した補助教材の開発をすることも考えられる。こうした副読本をめぐって提起された課題を議論し、解消していくことは、よりよいコウノトリ学習、そして「ふるさと教育」の展開を考える上で重要である。

おわりに

「ふるさと教育」におけるコウノトリ学習では、副読本は調べ学習においての重要なツールとして、こどもおよび教員から評価されていた。特に開始初年度であり教員がどのように授業を展開しているのかわからないこともあり、それゆえ副読本が果たした役割は大きかったといえる。課題として挙げられた副読本の貸与方式のあり方については今後の議論を注視していきたい。

また、豊岡市だけではなく現在各地で、地方創生に関連して「ふるさと教育」が実施されている。その際に、副読本は作成されているのか、作成されているとすればどのように活用されているのかについても、引き続き豊岡市のコウノトリ学習の継続調査と併せて検討していきたい。

謝辞

本研究は、兵庫県豊岡市との「コウノトリ次世代育成ふるさと教育効果検証共同研究」の成果の一つであり、また科学研究費若手研究 (B) (研究課題番号: 15K16248「絶滅危惧種の野生復帰事業にかかる野生生物保全教育の意義と課題の析出」) を一部利用しました。調査にあたり、ご協力いただきました小学校の皆様、そして、伊崎実那様をはじめとする豊岡市コウノトリ共生課の皆様および豊岡市こども教育課の皆様には多大なご協力をいただきました。ありがとうございました。また、アンケート調査の集計には、大正大学人間学部人間環境学科の清水実生子氏に協力をいただき、調査研究全般のアドバイスは大正大学人間学部人間環境学科の高橋正弘先生にいただきました。併せて感謝申し上げます。

摘要

兵庫県豊岡市で実施されている「ふるさと教育」で作成された副読本に着目し、その利用状況を市内の小学校へのアンケート調査、授業見学および教員へのインタビューにより把握した。その結果、副読本はこどもたちからわかりやすかったと評価され、教員からも使いやすかったと評価されていることがわかった。コウノトリ学習は調べ学習が中心であり、その際には、コウノトリや野生復帰に関する正確な情報が必要である。教員はコウノトリ学習を指導する際に、情報の真偽がわかりにくいインターネットよりも、副読本を参考にした方が正確かつ効率的であるため、副読本を役立つと認識していると

考えられる。貸与方式については、書き込んだりマーカーを引いたりすることができない、持ち帰りもしづら
いと意見も寄せられた。今後は貸与方式による課題を
改善してることが、よりよい学習を展開する上で必要と
いえる。

キーワード ふるさと教育、コウノトリ、副読本、豊岡市

注

- (1) 小学校5年生へのアンケート調査は、コウノトリ学習の前段階と後段階にそれぞれ実施しており、学習前は28問、学習後は32問の質問項目とした。内容はコウノトリに関する知識や関心を問うもの、学習姿勢を尋ねるもの、豊岡市への定住意思を質問したものなどとなる。市内の全ての小学校5年生を対象としたため、回答のしやすさ、集計の効率も考え、マークシートでの選択式とした。このうち副読本に関する質問は学習後にのみ2問設定したものである。一方、5年生を担当した教員へのアンケート調査は、コウノトリ学習後に実施し、ふるさと教育でのコウノトリ学習の実施状況について、記述形式を含め21問質問し、そのうち副読本に関する質問は3問である。なお、小学校5年生への学習前のアンケート調査の単純集計結果については本田(2018)を参照されたい。学習の前後でこどもの意識にどのような変化があったのか等については本田(2019)にて報告した。本研究では、これらの報告と重複しない、アンケート調査の副読本に関する質問結果や授業見学の結果を取り上げて、報告する。
- (2) インタビューは小学校5年生のこどもにも数名実施したが、本研究では教員へのインタビュー内容を一部取り上げる。小学校名については特定を避けるために授業見学を実施した順番にA小学校、B小学校、C小学校、D小学校とした。なお、A小学校のインタビューについては、筆者が実施できず、代理で豊岡市コウノトリ共生課伊崎実那氏に質問項目を渡し、実施してもらった。
- (3) なお、こどもへのアンケート調査は、担当教員が配布・回収をする形式であり、こどもたちが担当教

員の前で否定的な認識を回答しにくいというバイアスが発生する可能性も考えられる。ただし、本研究では副読本に関する結果を取り上げたが、それ以外の質問(コウノトリ、学習姿勢、豊岡についての認識を問う質問)については、学習前後で肯定的な認識が増加した質問もあれば、減少した質問もあった(詳細は本田(2019)を参照)。したがって、こどもたちは率直に回答していると考え、本研究でも多くのこどもたちが副読本を「わかりやすかった」と評価したと捉えている。

引用文献

- 古岡俊之(2003)小学校中学年社会科副読本の改善への提言：兵庫県における小学校社会科副読本の活用場面分析を通して。新地理, 51:28-38.
- 服部真一・大川智船・木本美知子・樋口大輔・平山大輔(2018)副読本を活用した小学校での森林環境教育の取組み－第6学年における教科横断的实践－環境教育, 28:40-45.
- 原伸気・成見宏太郎・鈴木愛理・井上奈穂・青葉暢子・麻生多聞・町田哲(2018)小学校社会科の地域学習における副読本の開発－徳島県における塩業の変遷に着目して－鳴門教育大学授業実践研究, 17:57-67.
- 本田裕子(2017)野生復帰事業が行われている自治体での副読本教材の作成状況について。環境情報科学論文集, 31:279-282.
- 本田裕子(2018)兵庫県豊岡市におけるコウノトリ学習に向けてのこどもたちの意識－「ふるさと教育」の実施に向けて－大正大学研究紀要, 103:28-46.
- 本田裕子(2019)兵庫県豊岡市における「ふるさと教育」としてのコウノトリ学習の導入と検討。環境教育, 28(3):25-34.
- 伊藤貴啓(2017)愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題。地理学報告, 119:83-98.
- 柏木智子(2018)総合的な学習の時間と地域学習。森田真樹・篠原正典(編)総合的な学習の時間。ミネルヴァ書房, 京都, pp. 188-203.
- 松井貞雄(1978)小学校中学年社会科副読本作成上の問題点。地理学報告, 47:188-195.
- 松井貞雄(1983)西三河における小学校社会科副読本の利用状況。地理学報告, 56:17-27.
- 玉井康之(2018)地域コミュニティの教育課題と学習社会の構築。玉井康之・夏秋英房(編)地域コミュニティと教育－地域づくりと学校づくり。放送大学教育振興会, 東京, pp. 230-244.

(2019年3月15日受理)

